

第三十一集の月号は、「文学・語学研究と国語教育の連携を
探る」というテーマで、それぞれの見地から原稿をお寄せいた
だいた。これまで私は、常に連携が図られているかのような気
持ちでいたが、実は易しそうに見えてそれほど簡単ではないと
いうことを今回実感した。初等・中等教育の教師が文学・語学
の研究の最先端に身を置くことは難しいことであり、また、文
学・語学の研究者も初等・中等教育の現場の状況を具に知るこ
とは簡単ではない。しかし、研究と教育現場が離れすぎて全く
別のもとなれば、それぞれの発展に限界が見えてくるのでは
ないだろうか。現在のところ、個人個人の努力やこの学会のよ
うな組織によって、かろうじて連携が成り立っているというの
が現状のように見える。今後は、より太い連携を図れるシステ
ムや方法を期待したい。現場の教師と研究者にとつて有益であ
るだけでなく、生徒たちにとつても現在の研究レベルを知ると
いうことだけでも有意義なこととなるであろう。

先日、ある会で若い会員の方の実践報告をうかがう機会が
あった。その報告からは、労力を惜しまぬ授業準備、時間のか
かる添削指導の様子が垣間見られた。さらに、若さあふれるア
イディアや失敗からあみだした新しい提案もあり、その熱意に
打たれるとともに我が身の引き締まる思いであった。このよう
な力が、これからの早稲田の国語教育を支えていくのかも知れ

ないと感じたところである。ただ、その会の参加者が少なかつ
たことがもつたいたなく思われた。会員の皆様の中にも、日々生
徒と向き合う中で貴重な体験をされたり、あるいは研鑽を積ん
でこれら豊富な知識や理論をおもちであったりする方も多いこ
とと思う。そのような貴重な財産を共有できれば幸いである。

さて、月号には論文・実践報告の投稿がなかった。これももつ
たいなく残念なことである。本誌は、特集テーマ以外の論文・
実践報告も募集しており、これまで多数の充実した論文・報告
を掲載してきている。特集のテーマのほかに、会員の皆様の
研究発表、実践の公開の場、さらには貴重な財産を共有する場
として、是非、本誌を活用していただきたい。

次号には「国語科教師教育の課題」「国語の「教養」」の二つ
のテーマを掲げることとした。この二つは、特に密接な関連が
あるということではないが、どちらも国語教育にとつて重要な
最近の問題である。詳しくは「テーマの趣意」をご覧ください。
皆様の幅広い見地からの活発な議論をお願いしたい。

本年度をもって、事務局としてご尽力くださった助手の有馬
さん、菊野さん、水上さんが交代される。お忙しい中、学会の
ために精力的に活躍され、編集委員の細かな要望にも対応して
いただき、本誌の業務のほとんどを負ってくださった。末筆な
がら、心より感謝申し上げる次第である。

(石出靖雄)

早稲田大学国語教育研究 第三十一集

二〇一一年三月三〇日発行

発行所 早稲田大学国語教育学会

代表 千葉俊二

東京都新宿区西早稲田一―六―一
早稲田大学教育学部内
振替〇〇一六〇一―八五二七番

印刷所 株式会社 文成印刷

東京都杉並区方南一―四―一